

鴻慶寺石窟第一窟について

KUNO, Miki / 久野, 美樹

(出版者 / Publisher)

法政大学史学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

HOSEI-SHIGAKU : Journal of the Hosei Historical Society / 法政史学

(巻 / Volume)

84

(開始ページ / Start Page)

1

(終了ページ / End Page)

20

(発行年 / Year)

2015-09-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00022254>

鴻慶寺石窟第一窟について

久野美樹

はじめに

鴻慶寺石窟（以下、「鴻慶寺」と略称することあり）は洛陽と長安を結ぶ崤函古道沿い、義馬市にある標高四三三メートルの白鹿山の崖壁上に鑿たれ、石窟の南に澗河、東には洛陽八関の一つ函谷関がひかえる。本石窟には北魏後期と唐の二期に計八窟が造られ、最も北にある北魏窟第一窟は現存最古の類に入る西方浄土図浮彫を有する仏教美術史上極めて重要な石窟であるにもかかわらず、従来窟内の各図像について積極的な比定作業、美術史的評価がなされていなかった⁽²⁾。そこで本稿ではこの鴻慶寺第一窟のみを取り上げ、図像と様式、制作年代等について論じる。

鴻慶寺第一窟は中心柱を有し、窟全体の平面は間口六・

一メートル、奥行六・五メートル、高さ六・一メートルの規模である。また全体として北東に一二〇度傾き南東に門口を開いており、前方のほとんどが崩壊破損する。

一、釈迦関係の造形

(1) 定光仏授記本生図(図1)とアシヨーカ王施土因縁図(図3)

正壁は幅六・二メートル、高さ六・一メートルあり、壁面中央横一列に高さ二五センチ〜三五センチの小型尖拱龕三五個がうがたれ(図4下方)、正壁全体を上下に分ける。下方には龕高一三五センチの四大龕が並び、左(向かって右)の第一龕から第三龕の中には一中尊二脇侍像が彫られていたと推察され、このうち第一龕、第二龕各中尊像は高

めの台座痕跡から交脚像、第三龕中尊像は低い方形台座に禪定印跏趺坐像が彫られていた可能性がある。第四龕像は全て破損して元の姿がわからない。

正壁上方の中央には幅三・五メートルにわたり後に述べる降魔図(図4)が浮き彫りされ、中央の釈迦像を失うものの、多くの精彩ある魔衆群を残す。降魔図の左側には定光仏授記本生図、右側にはアショーカ王施土因縁図と推察される浮彫がある。

定光仏授記本生図(図1)とは、釈迦の前生である青年修行者儒童菩薩が、少女から蓮華を買い求め、過去仏の定光仏(＝燃燈仏)にその蓮華を捧げ、また同じく儒童菩薩が定光仏の前に広がる泥に自らの髪を敷くことで定光仏の足が汚れないようにし、その手厚い供養に因り定光仏から未来に成仏する授記を受ける話である。

鴻慶寺の定光仏授記本生図は幅一・四メートル、高さ三メートルほどの浅い方形龕に浮き彫りされている。定光仏立像は体を右の儒童菩薩の方に少し傾け、撫で肩の幅広い体に双領下垂式に衣を纏う。楕円形に近い宝珠形の頭光をもつ頭部は失われ、右腕は屈し胸前で施無畏印をとり、左腕も曲げて腹前で掌を仰向け、第一、二指を伸ばし他の指を屈する。如来立像の左右には、宝珠形と思われる頭光を



図1 定光仏授記本生図

もつ長身の菩薩立像が各一体ずつ配される。宝冠をつけた左菩薩像は両手で胸前に半開の蓮華の花らしきものを持ち、右菩薩像は蓮書を持つかと思われる左手の甲を表に向け胸に当て、右の手を軽く屈して儒童菩薩から花部分を破損した一茎の蓮華を受け取ろうとする。菩薩像の周囲には数体の頭光をもつ比丘像があり、右菩薩像の右側には、菩薩像の四分の三ほどの背の高さで儒童菩薩像が左の菩薩像を仰ぎ見るように立つ。儒童菩薩像は左手に蓮書のついた三本の茎、右手に蓮書のついた四本の茎を握る。繰り返すとなるが左手の二つの蓮書は失われ、右手の二つの蓮書も破損する。なお、ガンダーラの作例にみられるような儒童菩薩が定光仏に髪を踏ませる場面は破損箇所を考慮しても、ここでは当初から表現されていないかと考えられる。

中国北朝期の定光仏授記本生図については、安田治樹、李静傑両氏の詳細な研究がある。定光仏授記本生図の源はガンダーラ、アフガニスタンにあり、それが雲岡石窟をはじめとする北魏の造形に伝えられた。定光仏授記本生図の構成には大きく分けて「異時同図法の説話的な表現形式」と「中央の定光仏を大きく表す礼拝像形式」の二つの形式があり、雲岡石窟には両形式がみられる。例えば雲岡石窟第一二窟前室東壁上方には、定光仏を中心に大きく表現す

る礼拝像形式の定光仏授記本生図が彫られている(図2)。そして鴻慶寺石窟の定光仏授記本生図の構図もまた礼拝像形式の範疇に入る。しかし、鴻慶寺の例ではさらに礼拝像化が進み、定光仏はやや儒童菩薩に体を傾け、儒童菩薩の蓮華を渡す行爲と関連性を見せるものの、両脇に脇侍菩薩立像を各一体従え、仏菩薩の三尊形式をとる上、蓮華の茎を受け取るのも定光仏ではなく右脇侍菩薩像である。また、雲岡石窟第一二窟像の儒童菩薩は五華をつけた一本にみえる蓮華の茎を持ち、これは『四分律』の「五花共一茎」の記述に近い。他の定光仏授記本生図の典故である『修行本起經』、『太子瑞應本起經』では、初め五花の蓮華を定光仏に散花し、後に二花を散じている。雲岡石窟(図2)では定光仏像の右に小さく表された儒童菩薩像が五茎の蓮華を持ち、五茎という数字が守られているが、鴻慶寺石窟では五茎に二茎を合計した七茎という数字のみを守り、儒童菩薩は右手に四茎の蓮華、左手に三茎の蓮華を持つ。そして何より、鴻慶寺石窟では雲岡石窟まであった儒童菩薩の布髪の場合が省略される。蓮華の茎を儒童菩薩像が持つことのみで、本図が定光仏授記本生図であると思われる。

正壁の降魔図をはさみ右側には、幅一・二メートル、高さ三メートルの方形浅龕にアショーカ王施土因縁と思われる



図3 アショーカ王施土因縁図(旧写真)



図2 雲岡石窟定光仏授記本生図

る図が浮き彫りされる(図3)。
 アショーカ王施土因縁は、土遊びをしていた子供が釈迦に土を施した功德の結果、やがて転生して転輪聖王と称されるアショーカ王になったという説話である。

釈迦仏立像を中心とする一群の像は、四本の柱により立つ立派な天蓋の下に配される。すなわち、天蓋は最上部に二列の鱗紋、その下に鋸齒紋、帷を垂らす。天蓋の左右の端には龍頭があり、そこから漢代の使者がもつ節につくような房状のものが複数下がる。中央の仏立像は壁面の中央に四分の三体を左に傾け立ち、双領下垂式に衣を纏い、大衣の先を掛けた左腕を軽く屈して楕円形の鉢を下に向ける。その鉢の先には、何かを差し出す両手が見え、童子像を破損するが、アショーカ王施土因縁図を表現していたと推察される。仏立像の前には上下に比丘立像各二体があり、上の一体は仏像と同じ方向を向き、下の一体は合掌して仏の方に体を向ける。仏立像の後ろには、上方に合掌し向き合う比丘立像各二体、その下に仏立像と同じ方向を向き、両手を胸前に置く菩薩立像二体を配す。

このアショーカ王施土因縁の主題もまたガンダーラ、アフガニスタンに源があり、しかも彼の地で前述の定光仏授記本生図と対で表される事、雲岡石窟でもこの二主題が同

じ空間に表現される点が安田氏により指摘されている⁽⁷⁾。雲岡では九例のアショーカ王施土因縁図が報告されており、このうち前述の第一二窟前室では左右東西壁上方に定光仏授記本生図、アショーカ王施土因縁図が相対して表現され、第一九A窟門口右西壁の龕にも、一坐仏二菩薩立像の左右に定光仏、アショーカ両図が配される。鴻慶寺第一窟正壁でも中央を降魔変とし、その左に定光仏授記本生図、右にアショーカ王施土因縁図を配し、この二主題を対で表現することがガンダーラ、雲岡石窟から鴻慶寺にまで伝わったと考えられる。

なお、現在失われている鴻慶寺アショーカ王施土因縁図の釈迦顔部は旧写真(図3)で優しく微笑んでおり、本図の出典が「於是世尊、即便微笑⁽⁸⁾」とある『付法藏因縁傳』とわかる。

さて李静傑氏は、雲岡石窟で定光仏授記本生図、アショーカ王施土因縁図と明らかに区別されていた二主題が、洛陽遷都を経た北魏後期以降、造形はアショーカ王施土因縁図のように童子像を大きな仏陀立像の横に造りながら、銘文に「定光仏」とする例が多く見られ、その最も早い例が龍門石窟古陽洞北壁第一六五龕像と指摘する⁽⁹⁾。そこには相拱龕中に一如来二菩薩立像を彫り、如来像の左下に跪く童子

像の痕跡が残る。説話性は失われ礼拝像形式が進んでいる本龕像には「永平三年(五一〇)四月四日(中略)敬造定光石像一区並二菩薩」の銘があり、本例以後、東西魏、北斉、唐までこのような現象がみられる事も李静傑氏により報告されている⁽⁹⁾。こういった事から、鴻慶寺石窟の例は、定光仏授記本生図、アショーカ王施土因縁図を混合して表現しない最後に近い例と言える。

(2) 降魔図(図4～図6)

正壁上方中央には幅三・五メートル、高さ三メートルの



図4 降魔図

降魔図の浮彫がある。降魔図中央下部の釈迦成道像は今日失われ、その上方と左側に、洛陽出土北魏孝子石棺浮彫にあるような樹木表現^⑩の菩提樹が残る(図4、5)。左側の菩提樹の下方には、元来成道像の光背に沿い付けられていたかと思われるふつくらとした五枚の蓮華の花びらのような形がみられる(図5)。それらは放射状に並ぶため、あるいは釈迦から発せられた光、あるいは炎の表現のようにも見える。その花びら形の左には、中央向きで三角帽を被り武装し猿顔をした魔王波旬と思われる人物が立ち、腰に左手で剣を横にして持ち、右手で三個の蓮蕾のついた茎を執る(図5)。魔王の後ろには被り物をつけ丸い鏡あるいは団扇を持つ魔王の三人の娘たちがいる。

成道釈迦像を失った中央龕の右には九体、左には魔王と娘たちを除き九体の魔物たちが、中央下方にかつてあった釈迦像に向け攻撃を仕掛ける。人間の形をした魔物は皆上半身裸形で短い腰巻をつけ、髪を結び上げるもの、三角帽をかぶるもの、髪を逆立ったものが各々弓矢、槍などを手にとる。中には全身が蛇や獣の魔物もいるが、体が人間で頭が猪、あるいは武装した猿もいる。本降魔図の中央上方には、二体の髪を逆立てた人間形魔物が両手を挙げて上の山のような物を持ち上げる(図4中央上方、6左上)。魔

物たちは躍動感にあふれ、その造形力、規模から考えて、完全に保存されていれば中国仏教美術史上屈指の降魔図であったといえよう。

さて、定光仏授記本生図、アショーカ王施土因縁図の一例が雲岡石窟にあつたように、降魔図も雲岡石窟に八例見られる。雲岡の八例のうち釈迦像、魔物等の形式に細かい差異があるものの、鴻慶寺の降魔図と共通する形が次の四点ある。

①降魔図の中央上方で山を持ち上げる魔物がいる。^⑪
②雲岡第六、第一〇、第三五各窟にも魔物の中に上半身裸形で腰巻をつけ頭が猪、猿のものがいる。

③雲岡第六、第一〇、第一二各窟の降魔成道図中、中央の釈迦を右上から弓矢で攻撃する魔物、それと対称に左上又は左から槍で攻撃する魔物の表現がある。^⑫

④雲岡石窟第一〇窟の降魔成道図では、鴻慶寺像と同じように釈迦像の左下に釈迦を誘惑する胡服を着た魔王の三人の娘が表現される。^⑬

鴻慶寺石窟の降魔図が雲岡石窟の降魔成道図と形式の上で共通点をもつことは、降魔成道図を造形する際の図像集のようなものが雲岡石窟と鴻慶寺石窟の間であつたことを物語る。殊に、共通点③とした攻撃する魔物の武器の位置



図5 降魔図魔王像部分



図6 降魔図右上方部分

が雲岡の三窟と鴻慶寺で一致している点は、図像集の明らか存在をうかがわせる。

一方、鴻慶寺の降魔図と雲岡のそれで異なる点もある。

①雲岡の降魔成道図にはない菩提樹の表現が鴻慶寺にある。

②雲岡の降魔成道図は、多くの区画に同じような大きさで各々表現された仏伝図の一つであるが、鴻慶寺では正壁中央上方の目立つ位置に降魔図を配する。

雲岡の降魔成道図になかった菩提樹表現が鴻慶寺に見られる点は、鴻慶寺の降魔図が表される際参考とした造形が雲岡の造形のみではなかったことを示している。鴻慶寺の樹木図の様式が、洛陽出土の北魏石棺に見られる中原的なものである点から、洛陽城内外の仏教寺院に描かれた壁画などを図像として参照した可能性が考えられる。その証左として、龍門石窟路南壁上部西側にある北魏末東魏初制作の降魔図⁵には、如来像上方に樹木表現がある。

また、雲岡と鴻慶寺における降魔図の位置、扱いの違いは、その石窟における降魔図のもつ意味の軽重に関係しているよう。鴻慶寺では制作に当たり降魔して成道した釈迦の行いを重視する意図が働いていたと推察する。

(3) 愛馬別離図(図7)

鴻慶寺石窟第一窟南壁左上方には、釈迦が出家した際、林の中で愛馬韃陟(カンタカ)と別れる場面が浮き彫りされる。悉達太子は宝冠と円形頭光をつけ、長い裾をはいた右足を左脚にかけ、右肘を曲げ半跏思惟の姿に表される。開花した蓮華と思われる物の上に踏み下げられた左足の先を、別れを惜しむ愛馬韃陟が前脚を屈し跪いて舐める。これは『過去現在因果經』中、出家の場面で太子が侍者と愛馬に城に帰るように促し、それを聞いた韃陟が「膝を屈し、



図7 愛馬別離図

足を舐め、涙落つること雨の如し」⁽¹⁶⁾であったと語られる場面を表している。太子像の前には日傘を差す侍女一体ともう一体女性らしき人物、他に冠をつける漢民族の文官のよくな人物七体ほどが浮き彫りされる。太子像の左下と岩場の間から大樹が生え、太子をはじめとする人物像群全てをおおう。樹木図は降魔図同様洛陽出土石棺に見られる松のような中原的表現である。

愛馬別離場面はインドに前例はなく、ガンダーラにまれに見られ、雲岡石棺に四例ないし六例ある⁽¹⁷⁾。このうち雲岡第六窟明窓西側像は太子の像高が約一・六五メートルの立派な愛馬別離図である。しかし雲岡の例にはいずれも樹木図が表されない。太子と目される半跏思惟菩薩像を大樹がおおう表現は龍門石窟北魏窟に見られ、これもまた中原的な表現と言えよう。しかし龍門石窟では貴人が跪くのみで愛馬別離図は確認できない⁽¹⁸⁾。

鴻慶寺石窟第一窟には、この他中心柱西(後)面に五尊像の痕跡のある大龕が一箇所彫られ、大龕上に鹿図を伴う初転法輪図⁽¹⁹⁾、同柱南面中央龕上方にも騎馬人物像と供養者像を彫る説話図⁽²⁰⁾があるとするが、今日摩滅が著しく詳細を論じることができない。また、北壁下方の残存する二大龕

像痕跡の上方西側には比較的鮮明な城と人物群像図がある。『鴻慶寺石窟』等は仏伝中の「宮中歡樂・出城図」⁽²¹⁾とするが、摩滅部分もありこの主題と特定するのは難しいように思われる。

以上、本窟の奥壁、左右壁部分、中心柱の現存部分には定光仏から釈迦の前生の修行者への授記、降魔図を主とする仏伝等が図像化され、修行者への授記、修行者が学ぶべき釈迦の生涯が主題となることが理解できた。

二、西方浄土図とその意義

鴻慶寺第一窟南壁では下層の四大龕のうち西から東へ数えて第一龕に交脚菩薩像、第二龕に何らかの像があった痕跡、第三龕、第四龕に一仏二菩薩像の痕がある。南壁上方西側には前述の愛馬別離図があり、その東側には釈迦多宝二佛並坐像の痕跡がある。注目すべきはその右、南壁上方中央の大画面形式の浄土図である。

(1) 西方浄土図(図8~11)

本浄土図の幅は二・三メートル、高さは三・三メートルあり、中央上方に三尊坐像、その下方に蓮池、伎楽天、蓮華化生像を配する。少し彫り下げ窪んだところに浮き彫りされた中尊像は頭部を失い全高は一五〇センチ、膝張りは九〇センチある。禪定印をとり、衣を双領下垂式に纏い右足を露出し跏趺する。長い裳には弧状の襷が左右対称につくられ、下半身及び蓮華座蓮肉部分に半円を描くように大きく懸かる。蓮華座の覆蓮の蓮弁は立体的な丸みがあり弧を描いて連なる(図8、9)。

その像の右側には、中尊像より一回り小さい全高一一〇センチの像が仰蓮の蓮華座に右足を露出し跏趺し、手は破損するが禪定印をとっていたようである(図8)。やはりこちらにも襷のある裳が下半身に大きく広がり懸かり、その右横からは薄物を連想させる帯がひらめく。大きな坐像をはさみ対称の位置にも同様の大きさの仰蓮と思われる蓮華座に跏趺する像があり、破損著しいものの、高い髻と宝珠形頭光が見て取れる。右坐像のさらに右側にも小ぶりの覆蓮蓮華座があり、頭部を破損するが、僧形で立つ人物像の痕跡がある。他にも菩薩形や僧形をした五、六体の浮き彫りの跡が三尊像の周囲に認められ、上方左端には楼閣の瓦

屋根、雲上の伎楽天らしき像の痕跡がある。⁽²³⁾

大きな三尊坐像の下部には蓮池があり(図8~11)、そこに楽器を演奏する者、踊る者がおり、これは『無量壽經』に言う伎楽天の像と考えられる。⁽²⁴⁾

注目すべきは蓮池の中で多くの蓮蕾、開きかけた蓮華、開いた蓮華の上に坐る人物像を浮き彫りしており(図9、10)、『無量壽經』、『觀無量壽經』の説く三輩往生を表現していると思われる点である。従って、この大画面は西方浄土を表現し、中央上方の三尊は無量寿仏、観音菩薩、勢至菩薩の各像をあらわしていると考えられる。

(2) 制作年代と中国仏教美術史上の意義

鴻慶寺石窟に制作年代を示す有年紀造像記は残されていない。鴻慶寺第一窟の制作年代についての従来研究は五説あり①宿白氏―五二八年の河陰の変前後②李文生氏―北魏後期③石松日奈子氏―北魏末から東魏④河南省古代建築保護研究所―洛陽遷都に近い年代、景明年間を下らず(四九四年頃~五〇三年頃)⑤賀玉萍氏―北魏末から東魏⁽²⁵⁾である。宿氏は熙平年間(五一六―五一八)洛陽城内に建立された永寧寺木造塔の構造、仏龕の配置が本窟ときわめて似ており、鴻慶寺第一窟は鞏義大力山石窟第一窟と共に永寧寺



図8 西方浄土図部分



図9 西方浄土図部分



图 10 西方淨土図部分



图 11 西方淨土図部分

塔を模したものであろうとする。⁽²⁷⁾そして、鴻慶寺第一窟にある仏伝図浮彫例は、宿氏が五二八年の河陰の変以後、五三四年頃までに造営されたと考えられる龍門路洞にみられ、鴻慶寺北壁西上方にみられる城楼檐下の人字形割束の曲線が路洞中の屋形龕と同様であるから、鴻慶寺第一窟の制作年代を五二八年の河陰の変前後とする。李氏は北魏後期に造営された鞏義大力山石窟内の中心柱四面上下に龕を設ける形式の類似から、鴻慶寺第一窟は北魏後期の作とする。⁽²⁸⁾

本稿冒頭からみてきたように、鴻慶寺第一窟の内容は雲岡第二期の造形に近い。仏伝図が多いこと、中でも降魔図の魔物の武器のうち、釈迦の右上からの弓矢、左上からの槍の方向も雲岡の降魔図と同じため、鴻慶寺第一窟と雲岡第二期窟との関係は密である。河南省古代建築保護研究所も指摘するように、太和一八年（四九四）の遷都より少し前に造営された雲岡第六窟との関係は特に近いと考えられる。一つには、鴻慶寺第一窟奥壁を上下に分ける横一列の千仏龕の存在（図4下方）、また、鴻慶寺石窟の定光仏本生図の菩薩立像は長身瘦せ型で（図1）、このような特徴が雲岡にもみられる。すなわち、雲岡第六窟中心柱西面下層龕外に左手で宝珠形香炉を掲げ立つ菩薩像などは、左右肘先から重なり垂れる天衣の形なども鴻慶寺の菩薩像（図

1）のそれと近い。⁽²⁹⁾そして、鴻慶寺のアショーカ王施土因縁図にみられる天蓋の横二列の鱗紋、その下の鋸齒紋のつくりは、五一七年頃までに造営された龍門石窟賓陽中洞の南北壁上方に見られる紋様と同様である。さらに、本稿の鴻慶寺アショーカ王施土因縁図の件で触れたように、永平三年（五一〇）龍門古陽洞龕像で定光仏授記本生図とアショーカ王施土因縁図の混合形が見られ、鴻慶寺では未だこの現象が現れていない点、鴻慶寺第一窟の造営年が五一〇年よりも前になる可能性すらある。加えて、西方三聖像が坐すたつぷりと丸い蓮華座の表現は、龍門蓮華洞の正光六年（五二五）五月一日銘南壁第六〇龕龕楣の宝珠の蓮華座をはじめ、蓮華洞の北魏窟龕浮彫にみられる。以上様々な要素から、鴻慶寺第一窟の制作年代は宿氏の提示する五二八年頃としておくのが妥当と考える。

本図については、中国における最初期の大画面形式による西方浄土図という極めて美術史的価値の高い浮彫であるにもかかわらず、李文生氏がわずかに「西方浄土を表現しているであろう」と一言述べるのみで、これまでほとんど注目されることがなかった。⁽³⁰⁾

従来知られている南北朝期の西方浄土図には、麦積山石

窟第一二七窟石壁龕上に描かれた北魏末西魏の西方浄土図⁽⁴⁰⁾、また六世紀前半から中頃の南朝で制作された成都万仏寺址出土の浮彫が西方浄土を表現している可能性があり、さらに北斉に造られた南響堂山石窟第一洞、第二洞浮彫⁽⁴¹⁾、同じく北斉の小南海中窟西壁の九品往生図⁽⁴²⁾が挙げられる。

麦積山壁画と成都万仏寺址浮彫は画面奥に無量寿仏が坐し、その無量寿仏像を中心軸にして左右下方が末広がりとなり一種の遠近法のような空間構成がなされ、このような表現は鴻慶寺の西方浄土図と異なる。また、小南海中窟の浮彫の九品往生図の構図は鴻慶寺石窟の西方浄土図と全く違う。強いていえば、無量寿仏をはじめとする三尊坐像を大きく中央に表現する南響堂山の西方浄土図が鴻慶寺のそれと似ているが、南響堂山の西方浄土図では、蓮華化生像を有する宝池が四角く太い陽刻線で囲われ、全体として空間表現にのびやかさが無い。この点鴻慶寺石窟の西方浄土図は、同じ宝池の中に西方三聖坐像と往生者像が浮き彫りされ、下方に伎楽天像もあり、むしろ初唐の敦煌莫高窟第二二〇窟の西方浄土図⁽⁴³⁾に近い。鴻慶寺の西方浄土図は前述のごとく北魏後期の制作と考えられるにもかかわらず、初唐の西方浄土図につながる要素をもち、これまでの中国仏教美術史の常識を塗り替える造形である。鴻慶寺石窟の立

地が長安と洛陽という文化の先進地帯を結ぶ街道沿いにあるため、このように進んだ様式の西方浄土図を生んだのであろう。

結びにかえて

鴻慶寺石窟第一窟の造形は、図像、様式面で雲岡第二期の造形と近い関係にあることが本稿第一節の考察で明らかとなった。

鴻慶寺石窟は洛陽に近く、その洛陽の南には鴻慶寺と同じ時期に造営された龍門石窟がある。龍門石窟には、著者が一九八九年以来指摘しているように、釈迦や釈迦・多宝二仏並坐、弥勒等の像を造り西方託生を望む造像記が無量寿仏像を造り西方託生を望む造像記よりも多い。そういった龍門の西方託生願望を明らかに示す造像記を改めて調べると合計一七例⁽⁴⁶⁾あり、その尊名は釈迦六例、釈迦・多宝二例、弥勒四例、無量寿二例、観世音一例、破損による尊名不明二例となる。釈迦像等を彫り西方往生を願う龍門造像記内容の状況は、鴻慶寺第一窟の、釈迦関係の浮彫を有し、弥勒交脚像、二仏並坐像の痕跡もあり、西方浄土図を造形する内容と一致する。

また本稿第一節では、鴻慶寺第一窟の主題として、修行

者への授記、修行者が学ぶべき釈迦の生涯の主題をみるこ
とができた。鴻慶寺石窟は洛陽と長安を結ぶ街道沿いに開
鑿され、人里離れた場ではなかったが、本石窟には「仙修
石窟」「先修石窟」と称したという民間伝承があり、石窟
の主題、伝承共に出家者の修行のための場であった過去を
彷彿とさせる。一方、同じ北魏期に造られた龍門石窟には
賓陽中洞に大きな本生図が彫られていたが、仏伝図は魏字
洞の龕楣に小さく彫られるなど、鴻慶寺第一窟と主題の抜
いに相違がみられた。これは龍門北魏窟が、修行者の場と
いうよりは皇帝から一般人に至るまで供養のための龕を設
ける場であった事が起因しているのではないだろうか。鴻
慶寺石窟第一窟と龍門石窟では、基礎となる信仰は釈迦、
弥勒を中心とする共通の内容であったが、石窟の機能が異
なっていたために、造形のあらわれ方に相違がみられたと
推察する。

本窟の破損摩滅の程度は著しい。一般に良質で完全な造
形を資料として扱う美術史学の立場からすると、このよう
な状態の資料から図像、様式の考察をおこなうことに疑問
も提出されかねない。しかしそのような問題を乗り越えて
でも、鴻慶寺第一窟の彫刻そのものの質の高さ、さらに本
窟がもつ最初期の西方浄土図の存在価値を伝えたいと考

え、あえて本稿を記した。

註

(1) 河南省古代建築保護研究所編『鴻慶寺石窟』中州古籍出
版社、二〇〇八年、一二六頁。鴻慶寺石窟第一窟の造形の
内容、方角、寸法については前掲『鴻慶寺石窟』一二七頁
～一三三頁を参考に、著者が二〇一四年一月に現地調査
をおこなった。鴻慶寺石窟には唐聖曆年間から清に至るま
での碑刻九基が残り、このうち明の碑は、則天武后がこの
地に立ち寄り本石窟寺の名称を鴻慶寺に改名したと記録し
ている。前掲『鴻慶寺石窟』一四九頁。

(2) 鴻慶寺石窟を専論する従来研究には次のようなものがあ
る。兪劍華・于希寧「灑池鴻慶寺石窟」『文物參考資料』
一九五六年第四期。李文生「灑池鴻慶寺石窟」『中国石窟
龍門石窟(一)』平凡社、一九八七年。前掲註(1)『鴻慶
寺石窟』楊超傑『洛陽周開小石窟全録』第二卷一頁～五七
頁、外文出版社、二〇一〇年。いずれも鴻慶寺第一窟の仏
伝美術の主題については言及するものの、本生・因縁、西
方浄土図について比定作業がおこなわれていない。

なお、本文で述べる通り、鴻慶寺石窟は北東に一二〇度
傾き南東に門口を開いているため、前掲註(1)『鴻慶寺石窟』
の記す方角と前掲兪劍華・于希寧論文、李文生論文の記録

する方が九〇度ずれ、前掲註(1)『鴻慶寺石窟』が西(奥)壁とするのが、兪・于、李各論文では北壁とされる。また石窟全体の番号は前掲註(1)『鴻慶寺石窟』と李論文は同じであるが、兪・于論文では南から番号するので『鴻慶寺石窟』の第一窟が兪・于論文では第四窟に当たるとする。

- (3) 安田治樹「雲岡石窟の彫刻にみられる本縁説話—アショーカ施土物語と燃燈仏授記本生—」『佛教藝術』一三五号、一九八一年。李静傑「中国北朝期における定光仏授記本生図の二種の造形について」『美学美術史研究論集』一七・一八号、一九九二・二〇〇〇年。安田治樹「ガンダーラの燃燈仏授記本生図再考」『立正大学大学院紀要』二六号、二〇一〇年。

- (4) 『四分律』大正藏二二・七八四下〜七八五下。
 (5) 『修行本起經』大正藏三・四六二上中。
 (6) 『太子瑞應本起經』大正藏三・四七二下〜四七三上。
 (7) 安田治樹、前掲註(3) 論文「雲岡石窟の彫刻にみられる本縁説話—アショーカ施土物語と燃燈仏授記本生—」四二頁〜四四頁。

- (8) 『付法藏因縁傳』大正藏五〇・三〇七中。大島幸代「アショーカ王施土説話の受容と造像の背景」『奈良美術研究』七号、二〇〇八年、一一九頁。

- (9) 李静傑、前掲註(3) 論文三〇頁〜三四頁、図一〇。
 (10) 例えば、黄明蘭編著『洛陽北魏世俗石刻線画集』人民美術出版社、一九八七年、図一〇の最も左に浮き彫りされた

樹木図が近い表現。

- (11) 雲岡石窟の降魔成道図①第二洞中心柱北面第一層中龕(摩減著しい)②第六洞主室西壁下層中央龕③第八洞主室北壁に痕跡あり④第八洞主室東壁第一層南龕⑤第一〇洞主室南壁第三層西部⑥第一二洞前室天井東側折上部分南⑦第二洞南壁上層西部(西部のみ残存)⑧第三五洞南壁西龕

- (12) ただし、このような造形のある雲岡石窟第六、第八、第一〇各窟のそれは一体の魔物なのに対し、鴻慶寺は二体の魔物である。また雲岡第八窟の山を持ち上げる魔物は、釈迦像の天蓋の右に表される。

- (13) ただし、鴻慶寺石窟例の規模が大きいためか、鴻慶寺の降魔図には失われた釈迦像の右側にも二体の魔物が各々一本ずつ槍をかまえて攻撃する場面が彫られる。

- (14) ただし、雲岡第一〇窟浮彫の魔王は釈迦の右側に表され、鴻慶寺像とは異なる。他の雲岡石窟例において娘たちは右側に彫られるなどして、必ずしも鴻慶寺像と同じ位置ではない。

- (15) 『中国石窟 龍門石窟(一)』平凡社、一九八七年、図二二。本石窟の主題については、王振国氏により詳細な研究がなされ、『法華經』の一六王子を表現しているとされる。王振国「龍門路洞調査報告」『龍門石窟與洛陽佛教文化』中州古籍出版社、二〇〇六年、一頁〜四三頁。

- (16) 『過去現在因果經』大正藏三・六三三中。
 (17) 雲岡石窟の愛馬別離図は①②第二洞中心柱西面第二層南

龕像と同北龕像。北龕像は摩滅著しく馬も跪いてない可能性がある。③④第六洞明窓西側と同東側。明窓東側の馬は破損して見られない。⑤第二九洞南壁中層西部⑥第四一洞北壁東部。

(18) 前掲註(15)『中国石窟 龍門石窟(一)』図五七、図七八、図九二、図九三。龍門石窟の樹下菩薩半跏思惟像は、男女を問わず貴人が跪く、供物を捧げるなどする像である。

(19) 兪劍華・于希寧前掲註(2)論文、四八頁。李文生、前掲註(2)論文二五六頁。前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一二八頁。

(20) 兪劍華・于希寧前掲註(2)論文四八頁〜四九頁。本文冒頭で述べたように、本窟の方角の記述が従来研究相互で異なり、前掲註(1)『鴻慶寺石窟』で南面とするのが兪劍華・于希寧前掲註(2)論文では西面に当たる。

(21) 兪劍華・于希寧前掲註(2)論文四九頁。前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一三〇頁〜一三一頁。李文生、前掲註(2)論文二五七頁〜二五八頁、挿図9は「一連の仏伝説話を表したものであろう。」としている。

(22) 李文生、前掲註(2)論文二五八頁。前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一三二頁、四八頁図版七八。

(23) 楊超傑、前掲註(2)『洛陽周圍小石窟全録』第二卷図二三。

(24) 『浄土三部経(上) 大無量寿経』岩波書店、一九六三年、一七三頁。

(25) 前掲註(24)書『浄土三部経(上) 大無量寿経』一六三

頁〜一六五頁、二〇四頁〜二〇六頁。

(26) 『浄土三部経(下) 観無量寿経』岩波書店、一九六四年、二六頁、二八頁〜三五頁。

(27) 宿白「洛陽地方における北朝期石窟の初歩的考察」前掲註(2)『中国石窟 龍門石窟(一)』二二六頁、二二六頁、二二二頁〜二二三頁。

(28) 李文生、前掲註(2)論文二五四頁。

(29) 石松日奈子「北魏仏教造像史の研究」ブリュッケ、二〇〇五年、一七四頁。

(30) 前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一七三頁〜一七四頁。本文()内の西暦年は本稿著者。

(31) 賀玉萍「北魏洛陽石窟文化研究」河南大学出版社、二〇一〇年、一八七頁。

(32) 宿氏は路洞の南北壁の浮彫について仏伝図と称しているが、本図については前掲註(15)に記したように、王振国氏により『法華經』の一六王子図という解釈がされている。

(33) 雲岡第六窟中心柱西面下層の仏誕生図に浮き彫された摩耶夫人の左の人物の長身で細い体つきなども、鴻慶寺の定光仏本生図にある菩薩立像と共通している。『中国石窟 雲岡石窟(一)』平凡社、一九八九年、図七三。

(34) 温玉成「龍門北朝期小合龍の類型と分期および北朝期石窟の編年」『中国石窟 龍門石窟(一)』平凡社、一九八七年、二〇六頁。

(35) 前掲註(2)『中国石窟 龍門石窟(一)』図八、九。

(36) 正光は六年六月孝昌に改元しているので、五月一五日の正光六年銘に違和感はない。『二十四史(魏書)』第二三卷、中華書局、一九九五年、二四一頁。本造像記は、『彙録』下巻二六八頁に彙一六四拓本写真が掲載され、同二六七頁に翻刻が掲載されている。

(37) 『蓮華洞』科学出版社、二〇〇二年、九九頁、図一四五。

(38) 李文生、前掲註(2)論文、二五九頁。

(39) 宿白、前掲註(27)論文、二二六頁(注49)には、鴻慶寺本浄土図を南響堂山の大福浮彫(西方浄土図)の起源とする件があり、宿氏は西方浄土図と考えていたようであるがそこには積極的な言及はない。

(40) 『中国美術全集 絵画編17 麦積山等石窟壁画』人民美術出版社、一九八七年、図五二一、図五五。

(41) 『中国国宝展』カタログ、朝日新聞社、一八三頁、出版番号一一九。

(42) 勝木言一郎『初唐・盛唐期の敦煌における阿弥陀浄土図の研究』創土社、二〇〇六年、一六一頁図三〇、一六二頁図三一。

(43) 稲本泰生「小南海中窟と滅罪の思想―僧稠周辺における実践行と『涅槃經』『観無量寿經』の解釈を中心に」『鹿園雑集』第四号、二〇〇二年。

(44) 『中国石窟 敦煌莫高窟(三)』平凡社、一九八一年、図二四。

(45) 「造像背景としての生天、託生西方願望―中国南北朝期を

中心として―」『佛教藝術』第一八七号、一九八九年。なお、南北朝期には釈迦、弥勒を造り託生西方願望を示す造像記が多く無量寿仏銘は少なめであることをすでに藤堂恭俊氏が指摘していた点について、石川琢道氏著書『曇鸞浄土教形成論―その思想的背景―』法蔵館、二〇〇九年において初めて知った。一九八九年時点での著者の従来研究探索の不完全であったことをここに記し、陳謝する。

(46) 龍門石窟北魏窟にみられる造像記を「無量寿仏以外を主尊とし託生西方願望を示す造像記」「無量寿仏を主尊とする造像記」に分けて年代順に箇条書きする。列挙順は以下のような凡例による。①制作年②造像記の位置③確認資料(確認資料は略称で記述。資料の完全な名称は後述)④造形⑤造像記抜粋。傍線、()は著者。

「無量寿仏以外を主尊とし託生西方願望を示す造像記」①①太和十九年(四九五)②古陽洞北壁第九四龕③龕一八四〇拓本④一仏二菩薩⑤・長樂王丘穆陵亮夫人尉遲・造此弥勒像一區願牛楸(亡息)捨於分段之郷騰遊無礙之境若生世界妙樂自在之處・②①太和二十二年(四九八)②古陽洞南壁第五八龕③龕二二九七拓本④一交脚菩薩二菩薩⑤・造弥勒佛一區願現在者安隱亡者諸佛濟敗常在安洛之處・③①正始三年(五〇六)②古陽洞北壁第六一龕③龕一八五五拓本④一仏二菩薩⑤・造釋迦像一區并二菩薩願端值生妙樂國土・④①永平三年(五一〇)②古陽洞北壁第一五八龕③龕一八七二拓本④一仏二菩薩⑤・造釋

迦像一軀願使託生西方妙樂國土・又願身平安遇與弥勒俱生蓮華樹下三會說法・⑤①永平四年(五一二)②古陽洞西壁第三一龕③NANO一一一X④龕頂上に六飛天、龕周圍に五三仏一交脚菩薩二菩薩二蓮華化生⑤・敬造弥勒像一區并五十三佛為亡母願亡母託生西方妙樂國土・⑥延昌元年(五一二)②古陽洞第二七〇龕あるいは第二六九龕③龕一八七六拓本④一交脚菩薩二弟子二菩薩、一仏?二菩薩二弟子⑤・造弥勒像二區使亡父母託生紫微安樂之處・⑦①延昌二年(五一三)②古陽洞西壁第三〇龕③録文八四一、彙二二四〇④一仏二菩薩⑤・託生西方淨佛國土・⑧①正光二年(五二二)②古陽洞南壁第一三六龕③録文六四七、彙二二二四④不明⑤觀世音像為貴中子願託生安樂處・⑨①正光五年(五二四)②火烧洞東壁第四龕③録文七五五、彙二六一三④一仏二菩薩⑤・造釋迦像一區・託生西方□□□□□□之處・⑩①孝昌三年(五二七)②蓮華洞北壁第五四龕③彙一一三七拓本④一仏二菩薩過去七仏、蓮華化生、維摩文殊⑤・造釋迦像籍此微功願令亡考比託生西方妙樂國土值佛聞法見弥勒・⑪①孝昌三年(五二七)②皇甫公洞③彙二二二八拓本、NANO〇三一五X④三壁のうち正壁大龕主尊一仏、左大龕主尊二仏並坐、右壁大龕主尊一菩薩坐像⑤・願生安養・⑫①大昌元年(五三二)②蓮華洞北壁第六五龕③彙一一四〇拓本④二仏並坐二菩薩六比丘⑤・造多寶佛兩區・離三徒八難託生西方安樂之處值遇諸佛・⑬①永熙二年(五三三)②趙客

師洞前壁第一一龕③録文四七二、彙一四三二④龕上に六坐仏、一仏二弟子二菩薩、二化生像維摩文殊⑤・造釋迦像一區友師忘者神生西方靜土值諸佛・⑭①永熙二年(五三三)②蓮華洞北壁第六六龕③彙一一四一拓本④一仏二弟子二菩薩二力士飛天維摩文殊⑤・造釋迦像一區在窟願亡父母託生天上安樂之處值遇諸佛・⑮①造像樣式から北魏②古陽洞南壁第一七九龕③録文〇六九一、彙二三五二④二仏並坐⑤・造釋迦牟尼佛多寶佛二區・恒遇諸佛同生妙洛遊之乘

「無量壽仏を主尊とする全ての造像記」○無量壽仏像をつくり明らかに託生西方願望を示す造像記には★印を付けた。①①★神龜元年(五一八)②彙第六三二龕、『總録』第六三三龕③NANO一七七X④一仏二菩薩尖拱龕上方八弟子⑤・無量壽□□夫託生西□□願□供②①神龜二年(五一九)②古陽洞南壁第一七三龕③NANO二〇二X④一仏二弟子二菩薩⑤・割資産造無量壽佛斯願天下一切含生有形之類速勝妙景及七世父母所生父母因屬知識常與遇弥勒三唱恒登先道・③①正光三年(五二二)②火烧洞東壁第一一龕③NANO〇二二三X④一倚坐仏二弟子⑤・造無量壽佛一區願長命老壽恒侍佛因緣④①正光四年(五二三)魏字洞南壁第八龕③NANO〇二三八X④一仏二弟子二菩薩⑤・敬造無量壽像一堪願亡者離苦得樂善津法界⑤①孝昌二年(五二六)②魏字洞南壁第三龕③NANO〇三〇〇一X④一仏二弟子二菩薩⑤・敬造無量壽供養⑥①孝昌二年

(五二六) ②魏字洞南壁第四龕③一仏二弟子二菩薩④NAN
 O二九七X⑤・敬造無量壽像一軀願出至天郷三有群少同
 律法澤普登正覺⑦①孝昌二年(五二六) ②魏字洞南壁第五
 龕③龕一五二九④一仏二菩薩⑤・敬造無量壽⑧①孝昌三
 年(五二七) ②蓮華洞北壁第九〇龕③NANO三〇八X④
 一仏二菩薩⑤・敬造無量壽像一區願亡者生天捨苦得樂・
 ⑨①永熙二年(五三三) ②古陽洞北壁第一九五龕③NAN
 O三六四X④一仏二菩薩⑤・敬造無量壽像一區・離苦
 得□值遇諸佛⑩①前傾「無量寿仏以外を主尊とし託生西方
 願望を示す造像記」の①孝昌三年銘蓮華洞北壁第五四龕像
 との造像様式比較で北魏と推定②蓮華洞北壁第四一龕③「蓮
 華洞」一二三頁拓本④一倚坐仏二菩薩維摩文殊⑤大統寺比
 丘道縁為己身眷属造無量壽像一區願生生世世值佛聞法・
 ⑩①★造像記中の「願」の字が北魏在銘願造像記のそれと
 同じなので北魏制作と推定②古陽洞北壁第一六〇龕③龕
 一九九三拓本④一仏二菩薩⑤・敬造無量壽像普為一切衆
 生願託彼國

上記「無量寿仏を主尊とする全ての造像記」中の①②⑨に
 ついては、倉本尚徳「北朝・隋代の無量壽・阿彌陀像銘―
 特に『觀無量壽經』との関係について―」『仏教史学研究』
 五二(二)二〇一〇年、表一「北朝・隋代の無量壽像銘」
 にも掲載されている。

〔出典資料の略称と略称〕
 〔葉、拓本〕劉景龍・李玉昆主編
 『龍門石窟碑刻題記彙録』上下巻、中国大百科全書出版社、

一九九七年の拓本写真。[NANO]：京都大学人文科学研究
 所ウエブ公開漢籍管理番号、[録文]：水野清一・長廣敏雄「録
 文」龍門石窟の研究』京都大学人文科学研究所、一九四一年。
 〔總録〕・劉景龍・楊超傑『龍門石窟總録』全一二巻、中国
 大百科全書出版社、一九九九年。〔蓮華洞〕・劉景龍編著『蓮
 華洞 龍門石窟第七二二窟』科学出版社、二〇〇二年
 (47) 前掲註(1)『鴻慶寺石窟』一五六頁。
 (48) 石松日奈子、前掲註(29)書、一六三頁。拙稿「中国伝
 統文化からみた龍門石窟―唐代の「場」を中心とした試論―」
 『佛教藝術』第三三〇号、二〇一三年。

〔図版出典〕

(図1、3、4、8、10、11) 河南省古代建築保護研究所編
 『鴻慶寺石窟』中州古籍出版社、二〇〇八年、図版五、
 五二、六、一五、一〇、一七、七三、八一、八三。
 (図2) 水野清一・長廣敏雄「雲岡石窟」第九巻、京都大学人文
 科学研究所、一九五三年、図版三九。
 (図9) 『洛陽周圍小石窟全録』第二巻三一頁、外文出版社、
 二〇一〇年、図二四。

〔付記〕本稿作成のため鴻慶寺石窟を調査するにあたり、塩沢裕
 仁先生、龍門石窟研究院の御支援を賜った。記してここに
 感謝する。